

小学校での英語活動の意義について

The Meaning of Elementary School English Activities

吉田研作

Kensaku YOSHIDA

上智大学

Sophia University

Abstract

The introduction of English activities at Japanese elementary schools is an important development for English education in Japan. The term ‘English activities’ implies not the teaching of English as ‘knowledge’, but getting students to experience communication through various tasks and activities. The term ‘soji’ (meaning ‘foundation’) has been used to describe what is expected of English education in elementary schools, and ‘kiso’ (meaning ‘basics’) to describe English education in junior high schools. The difference is in the use of English for the purpose of practical communication—without the need to analyze the structure of the language—in the case of ‘soji’, to the learning of the structures and forms of English for the purpose of higher cognitive levels of communication, in junior high schools. It is also mentioned that one of the major problems with English education in Japan is that English is the only subject not taught in the elementary schools, and therefore students have no basic experience of English before entering junior high school, where the emphasis is more on the teaching of English as ‘knowledge’ than as ‘communication.’

Keywords

Foundation, Basics, English Activities, Communication, Course of Study

1. はじめに

2006年3月に中央教育審議会外国語専門部会は、日本の小学校における英語活動の導入についての報告書を発表した(文部科学省, 2006)。しかし、いじめや高校における必修科目の未履修問題, 教育基本法の改正等, 様々な教育問題が浮上したため, ほぼ1年半にわたり, ほとんど手つかずの状態が続いた。2008年1月によく「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」がとりまとめられたが, 小学校英語に関する内容は外国語専門部会の報告書がほぼそのまま採用された。その内容をまとめると, 次のようになる。

- 1) 小学校英語活動の目的は, 中学校段階の文法等の英語教育の前倒しではなく, 幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うため, 英語の音声や基本的な

表現に慣れ親しみ、言語や文化に対する理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、中・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための「素地」をつくること。

- 2) 小学校において英語を必修化する。ただし、教科にはしない。
 - 3) 指導体制は、担任の教師とALTや英語が堪能な地域人材等とのティーム・ティーチングを基本とする。
 - 4) 小学校高学年(5・6年)において、平均週1回(年 35 単位時間)を導入する。
- 本稿では、上記の内容から、特に、1)の中の「素地」の意味について考えてみたい。

2. コミュニケーション能力を育成するための「素地」をつくるとは

新学習指導要領では、高校における最終的な目標として、英語でコミュニケーションができることがあげられているが、そのために、コミュニケーションの「基礎」を中学で築き、小学校では、コミュニケーションの「素地」をつくる、ということが示されている。2001年に発表された「英語指導法等改善の推進に関する懇談会(報告)」(文部科学省, 2001)で、日本の英語教育の最も大きな課題として、小学校から高校・大学までの英語教育を貫く「一本の柱」(一貫性)の構築があげられたが、新学習指導要領では、その点が考慮されているとあって良いだろう。つまり、小学校でコミュニケーション能力の「素地」をつくり、中学でコミュニケーションの道具としての英語の「基礎」をつくり、高校卒業時には、国際的な場面で英語でコミュニケーションができる能力を育成するところまで持っていこう、というのである。

小学校の英語活動は、今まで総合的学習の時間で行われていた体験としての英語活動と同じで、国際理解を促進するための道具としての英語、という位置づけになっている。つまり、英語の知識や技能を直接教えるのではなく、国際感覚(理解)を身につける過程で、英語の音や表現に触れることにより、結果として英語が身につけば良い、というのである。

小学校で考えられているシラバスは、英語の構造や単語、あるいは、英語の表現の学習を目的とした「構造シラバス」や「機能シラバス」ではない。英語は、あくまでもコミュニケーションの道具として学ばれるものであり、構造・単語・表現自体の習得を目的化してはならない。つまり、小学校では、机に向かって英語自体を学ぶのではなく、様々な活動やタスク(歌、踊り、ゲーム、外国の話や物語を聞く、外国人と触れ合う等々)を通してコミュニケーションの道具としての英語に慣れ親しむことが求められているのである。

また、英語活動を通して英語によるコミュニケーションに慣れ親しみ、経験を積むことにより、英語でコミュニケーションすることが楽しくなれば、英語を使って積極的にコミュニケーションしたいという動機が生まれ、中学・高校で、より高度なコミュニケーション能力を行う上で必要となる英語の構造や単語の学習が意味のあるものになる、と考えられている。現に、様々な研究や調査から、小学校以前に英語を学んだ場合、中学生や高校生になっても英語が好き、英語で話してみたい、もっと聞き取れるようになりたい、外国の人とコミュニケーションしたい、という肯定的な動機を持つ人が増えることが確認されている。例えば、森(2008)は、関東の私立中学の1・2年生を対象とした調査から、英語学習年数が英語力(英検取得級)と相関し、英語学習開始年齢が英語の実践的な使用に対する好意的な気持ちと有意な相関(逆相関)を示すことを報告している。

また、Benesse 教育研究開発センターが行った『東アジア高校英語教育 GTEC 調査 2006 速報版』(2007c)では、図1が示すように、小学校以前から英語を学んでいた高校生が次の各項目で、中学校で初めて英語を勉強し始めた高校生より、高い動機を示していることがわかった。「英語を話す人と友だちや知り合いになりたい」「知らない言葉を学ぶことがおもしろい」「世界をよりよく理解したい」「他の文化について学びたい」「メールなどが書けるようになって海外の人とやりとりがしたい」(筆者、要約)などである。

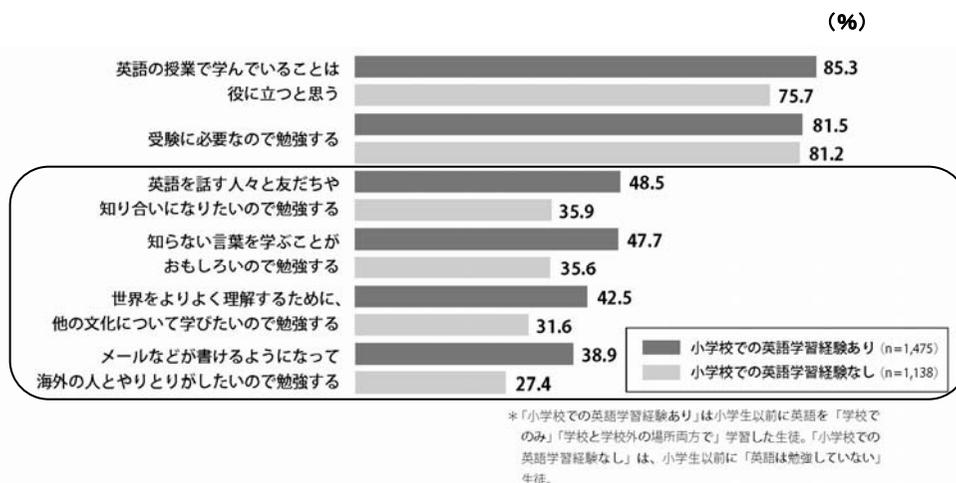


図1 小学校での英語学習経験と現在の英語学習に対する意識
『東アジア高校英語教育 GTEC 調査2006 速報版』

このように、国際理解の基礎づくりを小学校英語の目標に据えることには大きな意味がある。しかし、英語そのものの習得はどうなのか。国際理解の多くの部分は、言葉を通して行われるだろうし、そのためには、小学校でも英語の4技能等、英語の基本的な知識は必要ではないか、という議論がある。それに対して、中央教育審議会外国語専門部会は答申で、次のような見解を示している。

外国語のいわゆるスキルの習得に関しては、例えば、聞くことなどの音声面でのスキルの高まりはある程度期待できるが、実生活で使用する必要性が乏しい中で多くの表現を覚えたり、細かい文構造に関する抽象的な概念について理解したりすることを通じて学習への興味・関心を持続することは、小学生にとっては難しいことから、むしろ、ALTの活用等を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成等を基本とすべきとの指摘がある。(文部科学省, 2008b)

つまり、英語の4技能、そして、基本的な構造や表現、語彙等は、体系的に教えないよう

にしなければならないのであり、コミュニケーション・タスクやゲーム、歌などを英語活動に有効に使い、英語の音声、表現、語彙等に自然に「慣れ親しむ」ことによって、英語によるコミュニケーションに対する積極的な態度の育成が求められているのである。つまり、それが、コミュニケーション能力の「素地」の育成につながるのである。

2.1 コミュニケーションの「素地」とは

では、「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の『素地』を養う」ということは、どういう意味なのか、もう少し詳しく考えてみよう。

小学校英語活動は、外国語(英語)はあくまでも言語や文化を体験的に理解するための手段であり、中学校段階の文法等の英語教育の前倒しになってはならない。中学校では、英語を「知識」として教えることが求められるが、小学校ではそれをしてはならない。例えば、What's this? という表現があった場合、それを、What / is / this? と、3つの単語からなる表現だと、分析的に教えるのではなく、[What'sthis?] という、何かわからないものについて尋ねる時の1つの慣用表現として生徒に体験させることが大切なのである。[Canyou] ~? や、[Whatcoloris] ~? も、それぞれ、能力を尋ねる、あるいは、何かの色を尋ねる時の慣用表現として、実際に使うことにより、体験的に学ばせるのが小学校英語活動で求められていることなのである。

アメリカ人の子どもでも、文字を覚えるまでは、want / to を [wanna] という1つの単語として覚えているし、大人でも、外国語を学んでいる時は、「こういう状況でこういう表現を使うんだ」というように、言語の機能とそれを行うために慣用的に使われる表現を結びつけて覚えている。たとえば、韓国語で、「カムサハムニダ」と言えば、「ありがとうございます」という意味だが、この表現を「単語」に分けなさい、と言われても、韓国語の構造等の知識がない人にはできない。それでも、感謝をしなければならない場面ではちゃんと使える。小学校英語活動は、まさに、そのような体験を目標としている。そして、コミュニケーションの手段として英語が聞き取れ、ある程度使えるようになれば、生徒は「積極的にコミュニケーションを図ろうとする」ようになるだろう、というのである。

先生が英語で言ったことが「わかった」、自分が英語で言ったことが「通じた」という経験を積むことにより、英語でコミュニケーションができたという成就感を味わうことができれば、積極的にコミュニケーションをしよう、という態度が育成できると考えている。既に述べたように、いくつかの調査の結果から、小学校から英語をやっていた生徒は、中学から始めた生徒よりも、中学生として、また、高校生として、英語ができるようになりたいという気持ちが強く、英語に対してより肯定的な態度を示していることがわかっている。さらに、長沼は、Benesse教育研究開発センター(2007a)の報告書の中で、小学校時代に英語が好きだった生徒は、高校生になって英語が再び好きになることがあるが、小学校時代に英語が嫌い、中学でも嫌いだった生徒が高校生になって英語が好きになることは、少ない、という。

高校時に英語が「好き」と答えた学習者は、小中のいずれかの段階で好きになっている可能性が高く、高校になってから英語を好きになる割合は少ない。「嫌い」と答えた学習者では小学生段階から嫌いであった割合も高いが、それにも増して中学で嫌い

になった層が多い。……また、小学生の時英語が好きであった場合、中学生でつまずいても、もう一度高校で好きになる可能性があることがみえた。早期の段階で肯定的な情意を育てておくことの長期的な意味を考えていく必要があるだろう。

(Benesse教育研究開発センター, 2007a, p. 35)

つまり、小学校から英語を始めることは、長期的な効果を生む可能性があるのである。

さらに、英語活動を通して、コミュニケーションの重要性を体験し、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことにより、言語や文化に対する理解を深めることができる、と考えられている。例えば、英語のリズムや音声に慣れ親しむことにより、日本語以外の言語の存在を知ることができる。挨拶をはじめとする日常的な表現の違いに気づくことにより、社会的、あるいは文化的な違いを認識し、現代世界の言語的・文化的多様性を知るきっかけをつくることができるというのである。

ところで、小学校では[What'sthis?]や[Canyou]〜?などを1つの慣用表現として、1つのかたまりとして英語の表現を体験させることが目的だと言ったが、中学校では何をすれば良いのだろうか。小学校の「素地」に対して、中学校では英語の「基礎」をつくることの大切さが述べられている。この違いについて、考えてみたい。

上記のことを、たとえて言うならば、建物の「基礎」となるコンクリートやブロックを導入する前に、土地を整備しなければならないが、小学校英語活動は、その「地均し」(更地づくり)の役割を負っていると言ってよいだろう。コミュニケーションのために英語を用い、外国の言語や文化の存在を体感し、積極的に外国語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することにより、コミュニケーションの「素地」をつくる。上記の例でいうと、1つの表現としての[Howareyou?]は英語によるコミュニケーションの「素地」を構成するものであり、How/are/youと、その中身を分析して知識として理解することは、単語や文法という英語の表現の「基礎」を身につけることを意味する。つまり、英語の「基礎」となる文法や語彙というブロックを中学校でしっかり見つけられるようにすることが求められているのである。

[What'sthis?]や[Canyou]〜?を分析的に教えることにより、What's / this?とWhat's / that?の違いや、What' /s/ this?とWhat /are / these?の違い、また、Can / youとCan / IやCan / she等の構造的な違いを理解させるのが中学校英語の役割なのである。つまり、小学校で「体験した」表現を、今度は、体系的に理解するのである。

2.2 「飛び立つ」前の「滑走」の重要性について

ここで、1つ考えてみたいことがある。国立教育政策研究所(2005)の調査によると、中学校3年生の30%近くが、英語の授業がわからない、と答えたが、これは、他のどの科目よりも高いことがわかった。英語はそんなに難しい科目なのだろうか。英語の教師の教え方がまずいのだろうか。なぜ、こんなにも多くの中学校3年生は英語の授業がわからないのだろうか。

『第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査)速報版』(Benesse教育研究開発センター, 2007b)からは、次のことがわかった(図2)。これは、小学生の保護者に対して行われた調査だが、約55%の人は英語があまり好きでない、90%近くは英語を使う自信がない、

そして、なんと、約80%が学校の英語教育は役に立たなかった、と答えている。ということは、普通の日本人の大人の10人に8人までが、今までの中・高6年間の英語教育に否定的なのである。そして、それが国立教育政策研究所の調査にも現われているのだろう。

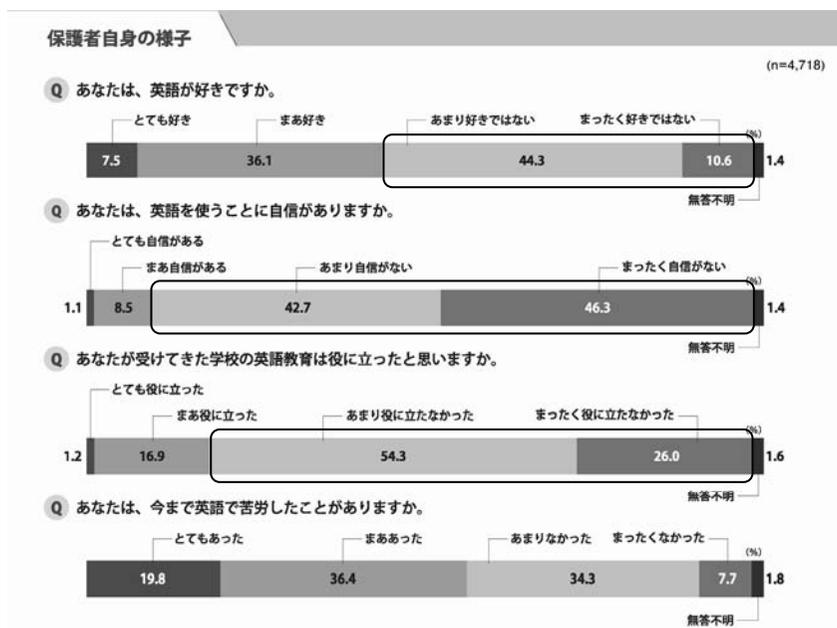


図2 保護者自身の様子

『第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査)速報版』

さて、なぜこのようなことになるのか。1つ大きな理由として考えられるのは、英語と他の教科(国語、数学、理科、社会、家庭科、美術、音楽、体育)との大きな違いに起因するものだろう。英語以外は、小学校から教科として教えられている。つまり、英語以外は、中学校で理論的な「離陸」をする前に、小学校で様々なやさしい形で「体験」的に学ばれ、「滑走」してきているので、中学校でいざ理論的に「離陸」する時になっても、それなりにスムーズに「飛び立つ」ことができるのである。それに対して、英語は、「滑走」(英語を使ったコミュニケーションの基礎)と「離陸」(文法等の理屈)が中学校1年時に同時に行われるために、「飛び立った」は良いが、直ぐに「墜落」してしまうのである。

小学校英語活動の意味は、この「滑走」にあると言えるのではないだろうか。コミュニケーションの「素地」とは、正に、この「滑走」を指していると言えるのである。だからこそ、英語教育を成功させたいのなら、他の教科同様、小学校から十分な滑走をさせて、十分な体験をさせてから中学校で「飛び立つ」という手順を踏まなければならないのである。

3. 文字の導入について

もう1点、小学校英語活動で気をつけなければならない点がある。小学校では、英語を体系的に、分析的に教えてはならない、となっているが、文字教育についても同じである。つまり、体系的に読み書きを教えてはならないことになっている。しかし、このことは、一切読

み書きを導入してはならない、という意味ではない。新しい小学校の学習指導要領の「外国語活動」の「内容」項に、次のように書いてある。

外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、音声面を中心とし、アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。(文部科学省, 2008a, p.96)

つまり、体系的に読み書きやアルファベットを教えるとはいえないが、例えば、絵カードと一緒に文字を見せるのは問題ない。特に小学校高学年になれば、音声言語に文字の補助があることは、理解促進に大いに役立つ上、知らず知らずのうちに、英語の読みが身につく。

私が運営指導委員をしている、埼玉県春日部市の粕壁小学校の渡辺元校長は、小学校1年生からずっと文字のついた絵カードでオーラル練習をしてきた子どもたちが、直接教えたことがない文字を読めるかどうか、上級学年の児童に試してみた。その結果、6年生で、今までに見たことがある単語の95%は正しく読める、ということがわかった。しかし、もっと興味深かったのは、文字が書けるかどうかを見た時に、例えば、□OG に「D」が入ることは、90%以上の子どもがわかっていたのに、ELE□HANTでは、40%以上の子どもが、「P」ではなく、「F」を書いたことである。つまり、子どもは、文字に接しているだけで、文字と音との関係を自ら発見する力を持っているのである。

4. おわりに

小学校における英語活動は、2011年からはよいよ必修化されることになった。しかし、現状では、まだその意味について十分理解されているとは言えない。中学校で教えてきた英語と小学校で扱う英語活動は同じなのか、違うのか。英語によるコミュニケーションの「素地」と「基礎」の違いは何か。そして、どうして、英語は他の科目と違って、嫌いな生徒が多いのか。本稿では、これらの疑問に対する著者の考え方を、色々なデータを基に述べた。小学校英語活動はまだ緒についたばかりだが、これからの日本の英語教育全体に与える影響の大きさから考えると、それが成功するかどうかは、想像以上に重要な意味を持つと言っただろう。

小学校英語活動を成功させるためにも、今後も様々な観点からの研究や議論が必要だろう。なお、小学校英語活動の在り方についてより詳しく知りたい方は、吉田(2008a・2008b)を参照されたい。

参考文献

- 国立教育政策研究所 2005. 『平成13年度小中学校教育課程実施状況調査データ分析に関する報告書』
- Benesse教育研究開発センター 2007a. 『研究所報VOL.43 東アジア高校英語教育GTEC調査2006報告書』 ベネッセコーポレーション.
- Benesse教育研究開発センター 2007b. 『第1回小学校英語に関する基本調査(保護者調査) 速報版』 ベネッセコーポレーション.
- Benesse教育研究開発センター 2007c. 『東アジア高校英語教育GTEC調査2006 速報版』 ベネッセコーポレーション.
- 森博英 2008. 「中学生の英語関連要因に見られる早期英語教育の影響」 第34回全国英語教育学会東京研究大会.
- 文部科学省 2001. 「英語指導法等改善の推進に関する懇談会(報告)」
Available: http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/01/010110a.htm [2009, 1月]
- 文部科学省 2006. 「中央教育審議会 教育課程部会 外国語専門部会 第14回 資料3-1: 小学校における英語教育について(外国語専門部会における審議の状況)(案)」 Available: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/015/06032708.htm [2008, 12月]
- 文部科学省 2008a. 「新学習指導要領 小学校学習指導要領」
Available: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/index.htm [2008, 12月]
- 文部科学省 2008b. 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」
Available: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf [2008, 11月]
- 吉田研作(編著) 2008a. 『21年度から取り組む小学校英語—全面実施までにこれだけは』 教育開発研究所.
- 吉田研作 2008b. 『新しい学習指導要領と信頼される学校教育の実現』 学校教育研究所.